

悠久の河

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

献身

彌兵衛に言われて振り返ってみると、毎年のように水害で心を痛めたのが嘘のように、ここ数年は、水害のことも忘れる日々だった。

「おう、五郎太よ、村の衆も今にきつと、この仕事は、村にとって、いかに大切な仕事だったのか気付いてくれようぞ」

彌兵衛は、静かな口調で言った。

「それは解っております旦那さま。けれどそのことのために米蔵からは米が消え、周藤家の山林からは木が消え、この四年の間に、村を救うために一所懸命になさった旦那さまが引替えになさった物は、余りにも大き過ぎたように思えます。私は旦那さまを尊敬し、信じていたからこそ、今まで黙って従って参りましたが、大奥さまも御内儀さまも、ゆうさまも、先の見えない工事にどんなに心細い思いをなさいましたとか。その上、ゆうさまは一番の心の拠となさっております旦那さまが、お姿が見えんようになりなされて…」

「勘六のことは、言うな！」

思いがけず、彌兵衛の強い口調の言葉に遮られて五郎太は、たじろいだ。

「病床で一人、ゆうさまは、さぞ心細い思いをなさっているだろうと心に懸ってなりません」



画 寺戸良信

五郎太は、独り言のように呟いた。

「五郎太、この村全体の幸せが無くては、庄屋の幸せは無いぞ。そう思うからこそ、総てをかけて川普請をやっておるのだ」

「旦那さまの気持ちは、良く解っております。ですから、今まで、この胸の内がどうしても言えないでございました」

五郎太は前にも増して、元気を無くしてしまつた。

「許せよ、五郎太。おまえの気持ちは嬉しい。工事の方も、やっと目鼻がついた。周藤の家におまえが居てくれると安心だ。ゆうもさぞ元気が出るであろう。頼んだぞ、五郎太」

彌兵衛は、意宇川の工事に着手してから初めて役目を離れて、一家の主らしい顔を見せた。意宇川の工事は五年目に入り、工事関係者の意気込みは、益々激しいものとなった。

周藤家の財政は、工事が進むにつれて逼迫してきた。そんな折りに噂を聞きつけたクニの実家の父、右衛門から、彌兵衛のもとへ陣中見舞いとして、金品が届けられ、彌兵衛とクニを感激させた。

右衛門は、彌兵衛の一途な気持ちをよく知っており、彌兵衛の心を傷付けないように援助金としてでは無く、陣中見舞いとして、金品を届け、彌兵衛とクニをこっそり援助したのだった。自分の力で意宇川の普請をすると約束した彌兵衛は、どんなに困っても、親族の援助に頼ったり、縁者に頼ることをしなかった。

一方、ゆうは五郎太の献身的な看病で、少しずつ元気を取り戻しつつ有った。